

第10回記念
梅花講員一泊研修会



南洋の美人(?)です

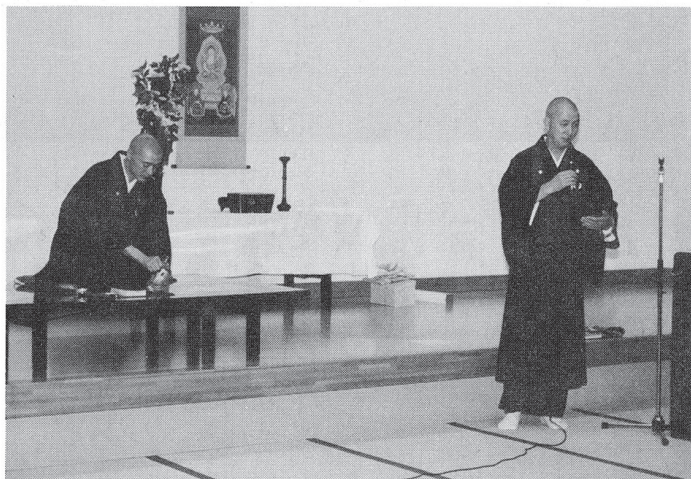
十回目になるのを記念して
 この十一月十三・十四日、秋
 田市「さとみ温泉」を会場に
 して、県北地区（能代、山本
 北秋田、大館、鹿角）の講員
 を対象に、一泊研修会が開か
 れた。参加者は一六七名。

夜の部
 // 登壇芸能大会 //
 に時も忘れる



平成 3 年12月18日
 第 5 号
 題 字 大館市宗福寺住職
 加藤信三老師御染筆
 発行所 北秋田郡森吉町本城
 浄福寺内
 秋田県梅花流師範会事務局
 発行 亀谷健樹
 編集者 (広報部)
 柴田弘一・保坂春聡
 印刷所 秋田県北秋田郡森吉町米内沢
 武石印刷 ☎0186-72-3319

マジメに講習も受けました



— 拝啓 秋田の皆さま —

師範・詠範一泊研修会に

お招きを頂いて



講師
伊藤正見

先般は、新築一年を経た曹洞宗秋田県宗務所「禅センター」を会場に行なわれた秋田県梅花流師範会主催の宗侶・寺族の一泊研修会にお招きを頂きまして、初中後大変お世話になりました。

前回、前々回と永田正道先生が講師であったということ、その重責にたぐ胸が苦しくなりました。

ちょうど盛岡での本庁検定と重なりましたが、四十四名の熱意あふるる師範詠範の方々と親しく、また楽しく講習できましたことは私にとりまして大変勉強になりました。

今回の研修会で感じたことは
①曹洞宗の中で全国で初めての本格的常設宗務所「禅センター」の設置。

- ②秋田県師範会の組織の重厚さ。
 - ③講員すべてに配布する『同行』の発行。
 - ④「心のハーモニー」「あったかプレゼント」など、梅花講の顔がいつも社会に向ってアピールしている。
- など他県の宗務所・師範会には比較できない恵まれたすばらしい「師範会」だと感じました次第です。

残念ながら講員の皆様にはお会いできませんでしたが、

「梅花上達の秘訣」は、

- (1) 熱意があること
- (2) 素直であること
- (3) 常にポイントをしぼって練習すること
- (4) 寺に通って繰返しの練習をすること
- (5) よい先生に出会うこと



だと感じます。

ともかくも秋田県の師範詠範そして多くの講員の皆様、梅花を通して更により友と出会い、生きてゆく楽しさを共に味わう日々であることを祈念して、お礼旁々筆を置きます。

向寒の折、ご自愛下さい。

平成三年十一月二十二日

静岡県藤枝市

宗乗寺住職

注

伊藤正見師範は、現在梅花流専門委員として御活躍中であり、この度師範詠範一泊研修会の講師として来秋下さいました。

十月三十日・三十一日の二日間、秋田市の「禅センター」を会場にして、四十五名の受講者に、発声法、旋謡法等を講習されました。

特派巡回報告

「いかつたナイ！」 福島県 巡回

鹿角市 恩徳寺副住職 岩 館 祖 芳

観測史上最大級の台風十九号は、未だに猛威の爪痕を残したままになっていきます。被災された皆様には、心よりお見舞申し上げます。

ところで、その二十八日から小生の夏に続いて二度目の福島巡回が始まりました。

直接、台風の進路でなかつたとは云え、夜半からの強風は天地を逆巻き、「これでは中止に違いない」とばかり思っていたらそれはゲスの勘ぐりでした。

驚く勿れナントマー、吹きすさぶ風に負けじと身をかがめ、続々と講員が本堂に着、その光景に胸つまる物を覚え、今更ながら梅花の尊とさ、素晴らしさを再認識すると共に、講員さん方のひたむきさに、これぞ純一無雑ならんと感服させられました。それから何会場目だったろう。連日の雨の中を詰めかける講員さん方を横目に、会場主である方丈様が、ボソリ一言

『困ったナイ！』と来た。

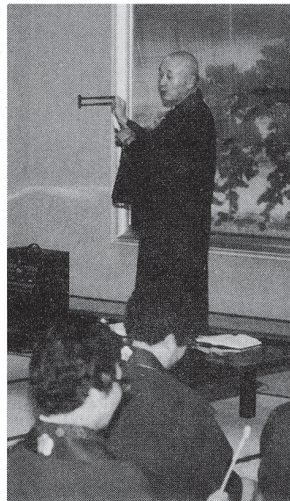
この語尾の「……ナイ」「……バイ」「……ダベッチャー」が広い福島共通の特長で、そののんびりした話し方が、妙にこちらの

気をそそる。

『いや、先生ホントに困ったナイ！』繰り返して語る言葉に切迫感がなく、むしろホノボノとした心地良い響きが耳を打つのは馴れ親しんだ精もあるうか。落ちつかない方丈様に『どうなさいました？』とおたずねすると、『もう間もなく開講式バイ講員さんは殆ど来たに、お寺さんが誰も来んバイ。』と来た。

それなら一番お手伝い。

『方丈様、ご心配なく！以前も一度こんな



講習中の筆者

ことありましたよ！方丈様が導師をお勤め下されば、私がかねとか木魚とかをさせて貰いましょう。』との私の申し出に、『前代未聞ダベッチャー。特派の先生にイそれはお願い出来んバイ。』と来た。

お講に依っては会場迄、二時間近くも駆けて来る。夏の日ならばいざ知らず、つるべ落しの秋の陽は夕闇迫る頃という。それ程に福島県とは広いのでアール。

『んでもナイ先生。特派はタツタ一回バイわたしら皆、楽しみにしとつとナイ。』

講員様は佛様。頭の下がる思いである。

午前の部は「紫雲」を含む開講式の所感や注意、また新曲紹介。言葉の一つ、所作の一つに食い入るマナコ、走るペン。昼食終って午後の部は早朝からの長丁場、足は痛いがお腹は満タン。自然にマブタが重くなる。ここからが腕の見せ所。あれやこれやのキャッチボール。コメディアンにと変身す。午前のマナコは何処へやらアハ、オホホの笑いの渦。

講習終えて日が暮れて宿に到着し一安緒否、これからがマタ戦争。

『先生は秋田だから、酒は強いバイ。サ一杯。』特派の前任任命し、巡回中は健康のため、アルコールを敵とせむ。心を鬼に望んだハズが「み篤き今日のおもてなし」ん？あな恐ろしや情なや心に反し手が伸る。

『では少しだけ……すこしだけ。』オットットスコシだけ。般若の智水が泌み渡る。伝統講から新設講。白房さんから教典すら持たない方まで、迎える姿は様々でしたが、教場総数二十三。二、〇八四人の皆様が、梅花を通じての真摯な心に見守られ、人の情に宿借りてのご詠歌三味でした。

今、改たためて感謝の念いを強くすると共に来春二月、二泊三日の講習会で、その多くの方と再会出来る幸福を併記し、謹しんで巡回報告とさせて頂きます。 合掌

シリーズ おらほの梅花講

しょうこうじ 常光寺

住所 北秋田郡上小阿仁村杉花
(十教区)
設立 昭和五十年八月二十六日
講長 嶋森哲雄
講員数 六十三人

私達の梅花講は、講員数は多いのですがご年配の人も多く、世代交替となつて若い人達が多くなり、新しく始めるのと同じです。私が育児や家事に追われた時代(ほんの?十年前) 本堂から聞えて来る講習会の三宝御和讃、修証義御和讃を口づさみながらメロデイとして聞いておりました。何時かは私も勉強したいものと思つておりました。

子供も成長し、ようやく私もお仲間にと、おばあさん達に混じつて、三宝御和讃に鈴鉦をつけてどうにか三番まで終りました。ほつとして隣にすわつているおばあさんを見ますと、きちんとふくさの上に作法通りの位置に鈴鉦が置かれ合掌しております。自分のを見ますと鈴鉦はふくさの上にも置かず、大変行儀悪くなつておりました。手早く置き直したものです(作法が一番大

平成2年 奉詠大会



事な事も知らずに)。その私の手本のおばあさんはもう鳩の杖をついて、若いお母さんにゆづつております。
現在は、お寺の法要には必ず奉詠参加いたします。また檀家さんのお葬式にも欠く事の出来ない御詠歌となっております。

お寺で行うお葬式には、施主家の人達が本堂に入り始めたら、静かに三宝御和讃をお唱えしております。梅花服に輪げさをした講員さんのお唱えの姿を見て、遠くから葬式に参列された人達が、とても荘厳でありがたいと申しております。

また初七日にもその家庭へ行き仏壇の前にて、無常御和讃、追弔御和讃をお唱えします。或る晩の事です。私だけ車の都合にて残りしました。少しお酒の入ったごきげんの父さんが、私に「なんと奥さんおら。たまげた、どこの人達と思つたら、隣の家の母さんだ、あんな真面目な立派な顔見た事ない、えらい者だ」と言つておりました

ので私は大変うれしく感じました。
講員の皆さんは素朴な真面目な人達ばかりです。今一つ勉強が足りなくてははずかしい次第ですが、梅花講は続けて行きたいと思つております。

紹介者 寺族 島森寿子

じしょういん 自性院

住所 南秋田郡天王町天王七一
(十三教区)
設立 昭和六十年二月一日
講長 鈴木道雄
講員数 八十九名

当寺の梅花講発足は、宗門梅花の大御所である新潟県法音寺の御住職飛田正道先生との出逢いから始まりました。

飛田先生と私は、たまたま趣味の尺八で同門同志になり、十数年前、大本山総持寺大祖堂で催された琴古流尺八研修会で同席して、同業のよしみからどちらからもなぐ声をかけ合い、尺八談義に花を咲かせたのがそもそもの発端となりました。

それ以後、尺八の会が催される度に先生とは必ず音楽の話をするようになり、話題が尺八から芸術へ、そして梅花へと進んで気がついてみると、それまで少しばかり梅花に批判的であった我身が、いつの間にか心の中に梅の蕾が一輪くくとふくらみ始めて、自然に梅花の世界へ身を浸すようにな

春の講習会



りました。更に講設置へと歩を進めるには
全く多くの時間を必要としませんでした。
また、講発足以来、先生には毎年三月に
特別講師として来山いただき、そのお陰様
により当寺の梅花講は、境内にしっかりと
根をおろして、今日では講員も増え上級へ
と段々と進んでまいりました。

この春の講習会は、先生の他に柴田先生、
柳川先生、佐藤広俊先生、更に新潟から、

山田賢隆先生、須
戸秀園先生と、豪
華な講師陣を招き
実に内容の濃い懇
切丁寧な講習会に
させていただき、
当初は当寺単独の
講習会でしたが、
先生方の威神力に
よって今では八ヶ
寺合同による恒例

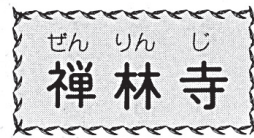
の会となるに至りました。

そして何よりも有難い事は、講員の一人
一人が春の講習会を自分自身の修行の場と
して、日常生活の心のオアシスと受け止め
ていただいていることです。また梅花をお
唱えることによってほのぼのとした「心
の楽園」が広がり、お唱える者、聞く者
を心楽しく豊かにしていることです。

お唱えしているこの現実こそが心和む素

晴しい世界であり、み仏との出逢いの場
であります。講員共々心の法輪を転じてゆき
たいものと念じております。

紹介者 講長 鈴木道雄



住所 由利郡仁賀保町院内
(十四教区)
設立 昭和五十五年八月三十日
講長 山中尚信
講員数 三十五人

私たちの梅花講は、副住職の山中律雄先
生より指導を頂いて十年余りになります。

先生に励まされ乍ら、毎月一の付く日、
つまり一日、十一日、二十一日の三回、夜
七時から九時まで、小休止を入れて二時間
の勉強です。

家庭のわずらわしさも、世相の雑念も、
暫し忘れて練習に没頭出来るこのひととき
の充実感、例えようのない心地よさを覚
えます。

時には佛教について学んだり、佛事のお
作法や佛様へ対する礼儀等いろいろな事を
教わったり、坐禅をしたり、方丈様からは
法話をお聞きしたり、多岐に渡って、ご指
導を賜わり視野の広い学習に参加出来るこ
とを嬉しく思います。

お寺の行事である涅槃会や大般若会等の

平成3年 奉詠大会



行事には必ず奉詠の場を設けて下さるので
詠讃歌の奉詠をさせて頂いていますし、お
寺で行われる檀家のお葬式の時にも、御和
讃や御詠歌を奉詠させて頂いています。

飛田正道先生を講師にお迎えしての講習
会をこれまで三回行っております。近くの
お寺の講員さん達にも呼びかけましたとこ
ろ、多数の方々がご参加下さいましたので、
盛会に終えることが出来ました。

毎年、梅花の検定会が近づくとお寺を心
よく解放して下さいますので、私達は階級
毎に練習に押しかけます。そして何日も何
日も寺族の皆さんの血圧が上がる程、ご迷
惑をおかけしております。

佛縁に恵まれました、
て、こうして一緒に
学ぶことの出来る喜
びを大切に、明るく、
仲よく、いつでも和
やかな雰囲気が続け
て行きたいものだ
と念じております。

紹介者 講員 斎藤キヨ

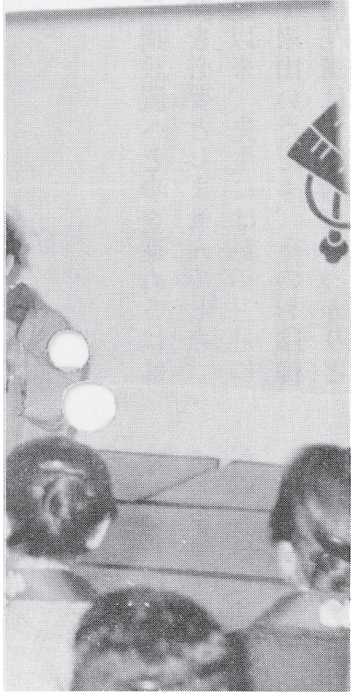
秋田の梅花流 IV

同行の編集者より、又お願いしますと、原稿用紙が届きました。電話で御遠慮しましたが聞き入れて貰えずおさまるかどうかペンを取りました。

来年は梅花発足四十周年の記念すべき年で有り、秋田の梅花も種を蒔いて三十八年になります。発足当初の師範、講員で鬼籍に入られたお方も数多く、七日市の老方丈様を中心に蓮菜台上で馥郁たる梅の香に園まれて練習や奉詠大会を開いておられる事でしょう。感慨無量です。

「至心詠唱」の延長である奉詠大会も毎年かかさず開いて二・三百人から千五・六百人の参加者となり、また各種の講習会も受講者が多くなり御熱心な事には頭が下がります。

お寺の本堂で飯台の上に畳を上げて急拵しらいの舞台（ステージ）「写真下参照」で各講毎の登壇や個人登壇で奉詠を頂きました。皆さん詠讚歌をお唱え出来る喜びを体一杯で表現しておられました。



於・秋田市 歡喜寺

三十五年初

めて中央大会と銘打って秋田観喜寺様を会場に開催。

その時は珍らしさも有ってか、ラジオ局からの取材が有り、参加講員にインタビュしたり、その日の夕方に県内に放送されたり仲々賑かでした。

その後の県大会は森岳温泉、秋田温泉（現さとみ）男鹿温泉での一晚泊りの奉詠大会で、夜間は賑かな登壇で皆様親睦を深められました。今ではとても考えられない楽しい奉詠大会でした。露の下地に梅花のバッチは、師範皆さんが鳩首協議の結果の傑作です。秋田の講員さんは誇りを以って輪袈裟に着けて



18教区第2回奉詠大会・個人奉詠

昭和31年9月23日
於・大館市 宗福寺

比内町 全応寺住職
佐藤 仁鳳



中央奉詠大会 昭和35年4月25日

「唱え起す梅花淨信の歌

調べは高く聲は静かにして一心和ぐ

麗人相伴うて孤苑にあつまる

十有五年自他を融ず

熊沢 禅師 偈

正法教会当時の会員証

秋田県 4番
本宮寺 支部 1号

正法教会 会員証
佐藤 仁鳳
30年 10月 10日

梅花流正法教会総本部

御注意
会員で左記各号の事由が生じたときは支部長を離れて総本部にこの会員証を提出下さい。
一、脱会、所属変更、改姓改名等の申請
二、職務の昇降補任、補命の申請
三、本部大会、本部講習会の参加
受贈の申請

下さい。ここでお願いですが輪袈裟に着ける講員章、教階章、年功章、大会章等正しく着けておい出の方が少ないようです、教階章は現教階だけにもう一度各自の輪袈裟を点検して見ましょう。

「心はかたちを求め、かたちは心を奨む」身心一如です。初めの頃の登壇は前述のような舞台で登壇降壇の時の足の運び方を皆さん注意もし、またその練習もしたように覚えてます。此の頃は大きなステージで平面な所を歩きますので余り考えておられないようですが、入退堂(場)を大切にしたいものです。「温故知新」お互様過ぎし日をかえり見て、詠道一筋に進みましょう。

教 階			経 歴		
勲 教	日	年月日			
(准補教)	日	年月日			
准 師 範	3/5/10	日			
(准一教)	日	年月日			
五 級 師 範	2/3/1	日			
(准一師範)	日	年月日			
四 級 師 範	3/12/18	日			
(准一師範)	日	年月日			
三 級 師 範	2/5/7	日			
(准一師範)	日	年月日			
二 級 師 範	5/12/1	日			
(准師範)	日	年月日			
一 級 師 範		日			
(准師範)		日			
正 任 師 範		日			
(正 流)		日			

つこころをよむ (四)

正法御和讃

花の晨に 片類笑み (拈華微笑)

雪の夕に 臂を断ち (慧可断臂)

世世に傳うる 道はしも

餘處に比類は 荒磯の

波も得よせぬ 高岩に

かきもつくべき 法ならばこそ

この御和讃は正法の題の通り、お釈迦様の尊いみ教えが歴代の祖師様方によって正しく相続され、曹洞宗に伝わった様子を示されており、曹洞宗の宗歌にもなっております。前節にお釈迦様から二代目の迦葉様にその法が伝わった様子を表わす有名な拈華微笑の話と、中国での禅宗の祖と仰がれる達磨大師から慧可大師に法が伝わった時の慧可断臂の話を詠われ、結句に道元禅師の道歌である「荒磯の…」で結んでおります。

お釈迦様が、霊鷲山で大勢のお弟子を前に法を説いておられました。ある朝、一言も語ることなく、一本のコンパラの華一本を高く拈げられました。大勢の弟子たちはその意味を理解できずにおりましたが、只一人迦葉様だけが、その意を解して、に

つこり微笑まれました。ここでお釈迦様は迦葉様が法を了解したことを見てとり、仏教の真理を授けられました。つまり、法は文字や言葉ではなく、以心伝心、心から心へ伝わるものだということです。

またお釈迦様から二十八代目の達磨大師は「真実の法を伝えなければ」との決意のもとに、晩年、三年の歳月を費してインドから中国に渡りました。しかし、仏心天子といわれる梁の武帝でさえも、その法を受け入れることができず、魏の国の少林寺にとどまり、九年の間、坐禅一筋に因縁の熟するのを待たれました。厳しい寒さの雪の日、神光という修行僧が訪れ、法を伝えてほしいと懇願しましたが「仏法を求むるは命がけでなければならぬ」とはねつけました。そこで神光は左の臂を斬り落して差し出し、仏法を求めぬる決意を示しました。こうして入門を許され、名を慧可と改め、中国禅宗の第二祖とられました。このように正法の伝灯は妥協を許さず、師匠から弟子へと正しく伝わり、道元禅師が中国に渡ってその法を嗣けて、日本に伝えられました。お釈迦様から数えて五十一代目になられます。

結句の「荒磯の…」は「梅花」の歌詞に



もなつておりますが、道元禅師の道歌で、「教外別伝」と題されております。

「大海の大波も寄せつけないほど高くそびえたつ磯辺の岩に、牡蠣貝がついている。どうしたことであろう。教外別伝の正法はことばでは書き尽すことができないので、何万巻の經典や祖縁を学ぼうとも、それだけでは到底寄りつくことすらできない。しかし、この貝が高岩につくように、その教えのまゝに坐禅の心を以つて、精進すれば不思議なちからがはたらき、美しいこころ（仏性）が現われ、不可能と思われる成仏もできるのである。」とのお示しです。

拈華微笑も慧可断臂もこの道歌も、仏法のギリギリの極意はとも口で言い表わすことは困難であることを示しております。梅花流も理屈ではなく、法悦、感謝、報恩の念をもって、心清浄、身端正にお唱えしなければならぬと定めております。つまり、声の美麗を誇りにしたり、節の巧拙を競うことを戒め、至心詠唱、帰依三宝こそが、そのまま仏さまの現成であるとの道念でお唱えするのを詠唱の心としております。声や節に自信のない方も安心して精進していたゞきたいものです。

大館市 温泉寺住職 佐藤舜英

秋田県梅花流師範会

半年を振り返り

事務局報告

三月五日、秋田市に於て、役員会、総会を開催、役員の変更は会長初め全員留任と成った外、詠範(寺族)二名に、各地区研修担当として六名加わり、大巾な増員と成った。(前号10ページ参照)

◎宗侶、寺族研修会

○特派師範による研修会は、七月七日合川町の太平寺、七月二十二日秋田市の宗務所「禅センター」と二会場で開催。

講師は北海道の田沢豊彦特派師範で、二会場とも、宗侶、寺族の参加者一同真剣に研修された。

○宗侶寺族の一泊研修会は十月三十日・三十一日の二日間、秋田市の宗務所「禅センター」を会場に行なわれた。

講師には、静岡県藤枝市の伊藤正見師範をお迎えし、発声法・作法、それに旋謡法と、微に入り細に入る講習、四十五名の受講者は時間のたつのを忘れて一心に研さんされた。



◎奉詠大会

○八月二十五日は大内町の農業環境改善センターを会場に、中央、県南の各地より二十七講、計六五五名の参加の元、式次第にしたがい、盛会の内に大会を終えた。

○九月八日は二ツ井町の勤労者体育センターを会場に、男鹿地区を含めた県北各地区より六十三講、一〇二五名の参加者で会場がうまった。

アトラクションに、秋田県警察音楽隊による演奏は、参加講員と一体に成って会場を盛りあげてくれた。

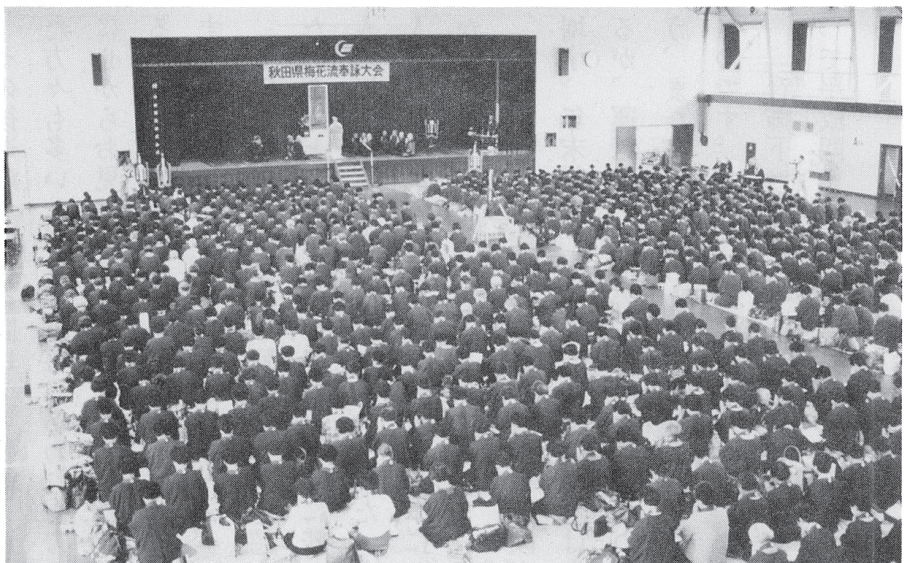
今年の特に両会場とも講話の時間を設け中央県南は太平寺住職亀谷健樹老師。県北は香最寺住職国安智哲老師による法話は奉詠大会に花をそえてくれた。

◎検定会

○八月二十九日は中央、県南地区を対象に秋田温泉「さとみ」を会場とし、二十八講より三〇二名受

今年も集まりました!

県北地区奉詠大会
9月8日、二ツ井町



検。

○九月十四日は大館北秋、鹿角地区を対象とし、二十講より六十八名受検。

○九月二十日は能代山本、阿仁地区を対象とし、二十二講より一三六名受検。

今年の特設検定受験者総数は、五〇六名で合格率は九十四パーセントだった。

事務局長 奥山芳寿



秋田市
禅センターに鈴鉦響く

「禅センター」

秋田市泉三嶽根15-18（平和公園入口）
 電話 0188-68-6871

禅センターの梅花講習

『初心者大歓迎』

いちど来て見ませんか！

（法具貸します）

一般者梅花講習会

- 平成4年2月1日（午後1時～4時）
 講師 近藤俊貞師範
 （西目町 円通寺）
- 平成4年3月7日（午後1時～4時）
 講師 奥山芳寿師範
 （森吉町 浄福寺）

宗侶・寺族梅花研修

- 平成4年2月19日
 （10時30分～15時30分）
 講師 佐々木 禅 壹
 特派師範
 （能代市 徳昌寺）
 ※昼食は御持参下さい。

編集後記



この秋、全国各地に甚大な被害を与えた台風十九号は、忘れもしない九月二十八日、県内にもおびただしい爪あとをのこしました。

その後遺症もいえぬ間に、年の瀬を迎えた方々も多いと思う。被害にあわれた方々に心からお見舞いを申し上げますと共に、来る年がよき年でありますようお願いしております。

今年も県内の交通事故死者が百名を超えた。なんとも痛ましい事である。特に若い人の無謀運転による事故が多い。また、老人や子供の車の直前直後を横断して車にひかれるケースが多いと。――

冬道だと足元が滑りやすく、更に危険が増す。年末年始と気持ちのせく時期ではあるが、運転者も歩行者も事故を起こさぬよう、また事故にあわぬよう充分注意したいものです。

「看脚下」健康第一と心得て、目標をもって平成四年をくらし参りましょう。

(K・S)